

02	一宮	西成中学校	サイトウ ユイ 名前 斉藤 由彩
分科会番号	特	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会

「探究」と「対話」を重視した道徳教育の創造 ～読み解いた資料から根拠を明確にし、交流を通して考えを練り上げる授業の実践～

1 主題設定の理由

(1) 生徒の実態

本校の第2学年の生徒を対象に、道徳科に関するアンケートを実施した。まず、「道徳の授業は好きですか」という質問に対し、「好き・少し好き」と回答した生徒は78.5%にのぼり、道徳の学習に対して肯定的な印象をもっている生徒が多いことがわかった。しかし、詳細な分析を行うと、いくつかの課題が浮き彫りになった。

「話し合い活動において、自分の考えに自信をもって伝えていますか」という問いに対し、「あまりあてはまらない・まったくあてはまらない」と回答した生徒が42.1%を占めた。その理由として、「自分の意見が正しいか不安」や「友達と違う意見を言うのが怖い」、「沈黙が流れるのが苦痛」といった記述が見られ、安心感をもって多様な価値観を出し合う「対話」の土壌が十分に整っていない現状が浮き彫りになった。

また、授業観察や振り返りシートの分析から、学習の質的な側面においても課題が見られた。例えば「思いやり」や「誠実さ」などの道徳的価値の重要性については多くの生徒が理解しているものの、「なぜそれが大切なのか」「資料のどの記述からそう考えたのか」といった根拠や理由を問う記述になると、回答率が著しく低下する傾向がある。ワークシートの記述も「〇〇が大切だと思った」といった主観的な一言に留まることが多く、資料を多角的に分析し、根拠を明確にして自らの考えを構築するに至っていない生徒が多い。また、他者の意見を聞く場面においても、単に「自分と同じ意見か、もしくは違う意見か」を確認するだけで終わってしまい、話し合い活動を通して自分の最初の考えをより納得感のあるものへと再構築していく「考えの練り上げ」の経験が不足していることが明らかになった。

(2) 生徒の実態を通して

前述のアンケートの結果から、道徳の授業に対して前向きに取り組もうとする生徒が多いことがわかった。しかしその反面、自分の発言に対する不安から対話に踏み出せなかったり、根拠を明確にして論理的に思考を深めたりすることに高い壁を感じているという現状も浮き彫りになった。特に、道徳的価値の『大切さ』はわかっている、その理由を具体的に書けていない点は、本研究における大きな改善のポイントである。また、対話が単なる意見の確認に終わり、「考えの練り上げ」に至っていない現状を打破する必要がある。そこで、資料分析や他者参照についての手立てを講じることで、生徒同士の対話が活性化されようと考えた。さらに、それらを繰り返すことで、主観的な思い込みを超えた多様な価値観に触れ、道徳的価値について自らの力で再構築し、考えを深めることができるのではないかと考えた。

2 研究のねらい

(1) 目指す生徒像

本研究で期待する生徒の姿を以下のように設定した。

自信をもって自分の考えを話し、交流を通して考えを練り上げることができる生徒

(2) 研究の仮説

道徳科の授業において、資料の事実に基づき根拠を明確にする活動と、ICT を活用した意見の可視化、およびアウトプットの連続性を重視した交流を工夫することによって、対話を通して自らの考えをより多面的・多角的な深まりのある考えへと更新・再構築できるようになるであろう。

3 研究の方法

研究の具体的な手立てとして、以下の3点を考えた。

(1) <手立て1> 5W1H (いつ・どこで・だれが・なにをした・なぜ・どのように) を用いた資料分析

① 5W1H による客観的な状況把握

道徳的価値の重要性を言葉では理解していても、資料を主観的のみで捉え、根拠を伴った記述ができない生徒は多い。そこで、本校で常時活動として行っている新聞活用のノウハウを応用し、登場人物の言動を 5W1H の観点で整理させる活動を取り入れ、客観的に事実を整理することで、思い込みに頼らない深い資料分析ができると考えた。

② 事実に基づいた根拠の明確化

分析した事実を根拠として示しながら、資料のどの記述からそう考えたのかという理由を明確にさせ、論理的な思考の構築を促すことで、主観的な一言に留まらない自分の考えを記述させることができると考えた。

(2) <手立て2> ICT を活用したさまざまな意見の可視化

① 全体の考えのリアルタイム共有

ICT を活用してクラス全員の意見を可視化することで、自分の考えを発表することに自信がもてない生徒も、自分と同じような意見や異なる視点を容易に見つけることができ、多角的な捉えを助けることができると考えた。

② 思考の整理を助けるグルーピング

可視化された意見を、似た意見や対立する意見にグルーピングする活動を行う。議論の核心や価値観の対立を視覚的に把握させることで、自分や他者のわずかな考えの違いが明確になり、より活発な意見交流になると考えた。

(3) <手立て3> アウトプットの連続性による「考えの練り上げ」

① 第2のアウトプットの場の設定

対話が単なる意見の確認に終わらないよう、「個人思考→対話(第1アウトプット)→再構築→対話・記述(第2アウトプット)」という展開を仕組み化する。他者の考えに触れた後で再度自分の考えを構築する場を設けることで、対話や記述を「考えの練り上げ」へと繋げることができると考えた。

② 思考の変容を自覚させるワークシートの工夫

最初の考えと再構築した考えを比較し、どのように考えが深まったか、その理由を記述させる。アウトプットを連続させることで、自分の考えが再構築される過程を自覚し、より多面的・多角的な価値理解に繋がると考えた。

4 研究の実際と考察

(1) 授業実践

資料1 1学期 授業実践（5時間完了）

時間	授業の教材と中心発問	手立て
1	『おじさん役と私』Aー（3）向上心、個性の伸長 個性を生かすときに、大切なことは何だろう。	手立て1-①② 手立て2-② 手立て3-①②
1	『リスペクト アザース』Cー（11）公正、公平、社会正義 集団で過ごすときに、大切にしたい考え方は何だろう。	手立て1-①② 手立て2-① 手立て3-①②
1	『五月の風ーカナー』Aー（1）自主、自律、自由と責任 自分の意志で行動するとき、大切なことは何だろう。	手立て1-①② 手立て2-② 手立て3-①②
1	『名乗り出なかった友』Bー（6）思いやり、感謝 思いやりのある行動において本当に大切なことは何だろう。	手立て1-①② 手立て2-①② 手立て3-①②
1	『足袋の季節』Dー（22）よりよく生きる喜び 人間の弱さと強さとは何だろう。	手立て1-①② 手立て2-② 手立て3-①②

(2) 研究の結果と考察

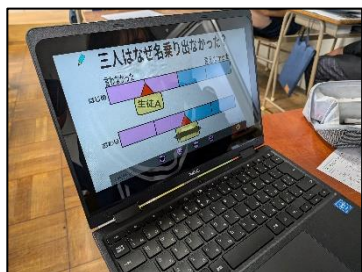
① <手立て1> 5W1Hを用いた資料分析による「探究」の構造化

全授業の導入段階において、資料の状況を5W1Hで整理する活動を仕組み化した。教材『リスペクト アザース』では、サンディエゴと日本という異なる舞台背景（Where）を整理することで、価値観の相違が生まれる社会的状況を客観的に把握させた。また、教材『五月の風ーカナー』では、主人公が相手に対して実際に何を伝えたか（What）という物理的な行動の記述を徹底して書き抜かせた。さらに、教材『名乗り出なかった友』の実践においては、ワークシートを用いて状況を整理させたところ、「三人の友達はお礼の言葉を聞いている間、黙って笑っていた」という客観的な事実を、学級全体で一律に共有することができた。これまでの道徳の授業では、範読直後に心情を問う傾向があり、記述が「恥ずかしがっている」「名乗り出なくてひどい」といった主観的な一言に偏ることが課題であった。しかし、本手立てにより「黙って笑っていた」という動かぬ証拠を全員が共有したことで、その後の個人思考において、「その沈黙は勇気のなさなのか、それとも意思のある謙虚さなのか」という、資料の事実に基づいた論理的な推論が可能となった。この検証から、5W1Hによる事実確認が、思い込みを排して深く資料を読み解き、道徳的価値を探究するための不可欠な土台となることが明らかになった。

② <手立て2> ICTを活用したさまざまな意見の可視化

教材『名乗り出なかった友』や『足袋の季節』の実践において、ICTを活用し、デジタル教材の「心の数直線」（資料1）や、Canvaの「ホワイトボード」機能（資料2）を用いて、生徒一人ひとりの納得度や心の揺れをリアルタイムで可視化した。可視化の最大の成果は、他者との解釈の「ズレ」や「異なる視点」を客観視させ、それを対話の入り口にできたことにある。「心の数直線」を用いて話し合いをした際、画面上に示された自分のマーカーと友達のマーカーの位置に僅かな違いがあった場合、「同じ事実を見ているのに、私はまだ迷いのあたりにいるけれど、あなたは どうしてそんなに強い意思の方に立場を置いているの?」といった、根拠の捉え方を深掘りする質の高い問いが自然に発生した。具体的には、教材『名乗り出なかった友』において、当初は「恥ずかしくて言えなかった」という消極的な位置にいた生徒が、資料の事実を根拠にした友達の意見に触れ、「これは迷いではなく、当たり前のこととして大切にしようとする強い意思なんだ。」と納得し、自らのマーカーを大きく動かして考えを再構築する姿が見られた。一方、教材『足袋の季節』では、Canvaの「ホワイトボード」機能を用いてさまざまな意見の集約とグルーピングを行った。ホワイトボード上に提示されたクラス全体の意見の中には、「謝れなくなった絶望」や「自分の過ちへの後悔」といった記述が多く見られたが、同時に「おばあさんの言葉が今の自分を支えている」という前向きな意見も並んで示された。自分とは異なる、価値を前向きに捉えた他者の視点を視覚的に確認できたことで、絶望や後悔という意見に立ち止まっていた生徒がその根拠を主体的に取り入れ、「おばあさんの言葉を忘れないようにしてこれからの自分の力にしていこう」という、内容項目「よりよく生きる喜び」について考えを深めている姿が見られた。

さまざまな意見の可視化は、個々の固定概念を客観視させ、事実に基づいた多面的・多角的な価値理解を促進する手立てとなった。さらに、事前アンケートで「友達と違う意見を言うのが怖い」と回答していた生徒も、画面上で自分と同じような位置に仲間がいることを確認できたことで心理的な安心感を得て、積極的に対話に臨む様子が顕著に見られた。



資料1 デジタル教材「心の数直線」



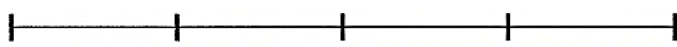
資料2 Canvaの「ホワイトボード」

③ <手立て3> アウトプットの連続性による「考えの練り上げ」

すべての授業実践において、本校の重点事項であるアウトプットの連続性を重視し、「個人思考→対話（第1アウトプット）→再構築→対話・記述（第2アウトプット）」という展開を仕組み化した。単に対話を「意見の共有」で終わらせるのではなく、他者の視点に触れた後で、自らの最初の考えを再度練り直し、言語化させる場を毎時設けた（資料3）。具体的には、教材『名乗り出なかった友』の実践において、当初は沈黙を「恥ずかしさ」という主観的な感情としてのみ捉えていた生徒が、対話を経て「褒められることを求めない本当の優しさ」や「良いことを特別視せず、当たり前のこととして大切にしようとする強い意思」というより深まりのある道徳的価値へと自らの考えを再構築させる姿が多く見られた。また、教材『足袋の季節』では、「謝れなくなった絶望」という意見に立ち止まっていた生徒が、友達の意見をふまえて「おばあさんがくれた心を次は自分が誰かに差し上げる」という生き方への決意へと視点を広げていた。

このように、アウトプットを連続させ、自分の考えが洗練されていく過程を記述させる活動は、生徒が自分一人の視点を超え、多面的・多角的な視点を取り入れた「納得感のある考え」を自律的に練り上げるために極めて有効であったと言える。

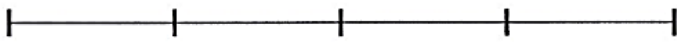
対話を通して深まった 今の自分の考えをまとめよう



↓どちらかに○をつけて、自分の考えをまとめよう
 (考えが変わった 更新された ・ 考えに確信がもてた)

最初は自立したくなくて言わなかったと思っていたからあえて言わなかったという事もあったからとっつきあるとわかりかけたあえて言わなかったの今の考えになった。

対話を通して深まった 今の自分の考えをまとめよう



↓どちらかに○をつけて、自分の考えをまとめよう
 (考えが変わった 更新された ・ 考えに確信がもてた)

おはあさんにしてもらって、これを忘れないようにする。これは他の人の意見と私の意見とを比べて、おはあさんにしてもらったことを覚えておかないことはダメだということだった。

資料3 授業ワークシート

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 導入段階で5W1Hを用いて資料の状況を整理させることで、心情推測の前に「客観的な事実（証拠）」を学級全体で共有することができた。これにより、資料の記述を根拠とした論理的な道徳的価値を探究するための土台を築くことができた。＜手立て1＞
- ICTを活用して意見の分布や心の数値を可視化することで、他者との僅かな差が明確になった。自分と同じ意見を視覚的に確認できる安心感が「友達と違う意見を言う怖さ」を和らげ、数値の根拠をお互いに問い合うことで、多面的な価値理解を促進することができた。＜手立て2＞
- 「個人思考→対話（第1アウトプット）→再構築→対話・記述（第2アウトプット）」というアウトプットの連続性を仕組み化し、変容の理由を記述させたことで、生徒は自らの考えが更新されるプロセスを自覚できた。＜手立て3＞

(2) 今後の課題

本研究を通して、資料の事実に基づく探究と、アウトプットを連続させる対話のシステム化は一定の成果を収めた。今後は、以下の2点を中心にさらなる研究を進めていきたい。

① 「納得解」を日常生活へと持続させるためのカリキュラム・マネジメント

1学期振り返りの記述（資料4）において、ある生徒は、「友達と意見が違ったときに、『何でそう思うのか』と理由を聞くようになった。人によって大事にしているところが違うんだなと気づけた。」と綴っている。これは、本研究の手立てが「他者の視点を尊重する資質」として内面化されつつある現れと考える。一方で、こうした教室内の「気づき」を、葛藤の多い日常生活の中でいかに主体的な「行動」へと繋げていくかが課題である。道徳科の授業を要として学校教育全体で道徳性を養うために、教科横断的に道徳教育に取り組んでいくことができるようカリキュラム・マネジメントを工夫していく必要がある。

② 「納得」のプロセスを客観的に評価する手法の構築

別の生徒は、「自分の考えを最後まで通すのではなく、友達の意見を聞いて、そっちの方が納得できると思ったら考えを変えられるようになった。」と記述している。この「納得できると思ったら」という判断基準こそが本研究の目指す「考えを練り上げる姿」であるが、生徒がどの意見をどのような論理的根拠で「納得できる」と評価し、自己の価値観を再構築したのか、その思考の変容プロセスをより客観的に把握する手法の工夫が求められる。今後は、ICTを活用して可視化されたさまざまな意見を生徒同士が比較・分析する活動をさらに深化させ、振り返りシートの分析と連動させていきたい。

② これまで道徳科で学んだことを振り返って、考えたことを書いてみよう。

(例) ・授業で学んだこと ・自分の考え方に生かされていると思うこと
・自分が成長したと思うこと ・これからの自分にプラスしたいこと

友達と意見が clashed ときに、何でもそう思うの？と理由を聞くようになった。人によって大事にしていることが違うんだなと気づきました。日常生活でも、自分の意見だけでなく、友達の見解も大切にできるように努めています。

② これまで道徳科で学んだことを振り返って、考えたことを書いてみよう。

(例) ・授業で学んだこと ・自分の考え方に生かされていると思うこと
・自分が成長したと思うこと ・これからの自分にプラスしたいこと

自分の考えを最後まで通すんじゃないくて、友達の見解を聞いて、そっちの方が納得できると思ったら、考えを変えられるようになった。

資料4 1学期振り返りの記述

6 おわりに

本研究を通して、道徳科における教材研究とは、単に登場人物の心情を追うことなく、資料に潜む事実を精緻に読み解き、そこから立ち上がる価値を生徒と共に探究していくプロセスであることを再確認した。本校の重点目標である読解力向上と、道徳科における価値の再構築をいかに融合させるか、今後も生徒の実態に寄り添いながら、一人ひとりが自信をもって自らの生き方を構築していける授業実践に努めていきたい。